

MACF 礼拝説教要旨

2022年7月24日

「使徒たちは出かけて行った」

ルカによる福音書9章

9:1 イエスは十二人を呼び集め、あらゆる悪霊に打ち勝ち、病気をいやす力と権能をお授けになった。

9:2 そして、神の国を宣べ伝え、病人をいやすために遣わすにあたり、

9:3 次のように言われた。「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない。

9:4 どこかの家に入ったら、そこにとどまって、その家から旅立ちなさい。

9:5 だれもあなたがたを迎え入れないなら、その町を出ていくとき、彼らへの証しとして足についた埃を払い落としなさい。」

9:6 十二人は出かけて行き、村から村へと巡り歩きながら、至るところで福音を告げ知らせ、病気をいやした。

イエス様は12使徒を招集し、いよいよ使徒としての務めに派遣します。

ちなみに「使徒」という名前は「遣わされた者」「派遣された人」という意味があります。

この人達の権威は決して自分たちの力や知恵にあるのではなく、遣わした人、ここではイエス様の権威と支えがすべてです。

彼らが遣わされた役割は「神の国を宣べ伝え」「病人を癒やす」ということにありました。

そして、そのための権威はイエス様が使徒たち一人ひとりに授けてくださいました。

1) 「神の国を宣べ伝える」

これは、どのような状況にあっても、イエス様を信頼することによって神様からの支配が届き、神様からの救い、平和、喜びが心に届くというメッセージです。私達は行き止まりとか、絶望を感じるがありますが、神の国の福音は、それらの状況の中に光を、そして希望を、喜びや感謝をもたらすものとなります。神

がそれらの状況を支配してくださり、その愛で包み込んでくださるからです。

神の国は、それぞれの心の中に到来するのです。

2) 「病人を癒やす」

彼らは医者ではありませんでしたが、手当をしたり、祈ったり、寄り添ったり、話を聞いたりするなかで、神様の愛の力が働いて癒やしのみわざが実現しました。

今風にいえば、霊能者のように見られたかもしれませんが、先にも言いましたが彼ら自身が特殊な霊的能力をもっていたわけではなく、イエスの御名によって祈ること、イエスの御名によってふれることで癒やしがもたらされたのです。

実は今朝の説教のメインの部分はその部分ではないのです。それはイエス様が使徒たちに語った注意事項と使徒たちが出かけていったという点についてです。

3) イエス様の注意事項

9:3 次のように言われた。「旅には何も持って行ってはならない。杖も袋もパンも金も持ってはならない。下着も二枚は持ってはならない。

9:4 どこかの家に入ったら、そこにとどまって、その家から旅立ちなさい。

9:5 だれもあなたがたを迎え入れないなら、その町を出ていくとき、彼らへの証しとして足についた埃を払い落としなさい。」

これは今風に言うと「托鉢」に似ていますね。

何も持たずに旅に出るという生き方。

2つの点が特徴的です。

まず「絶対的な神への信頼」と「人のお世話になることをよしとする心」です。

平たく言えば

神様への信頼を土台にして「助けてください」とも言えるし「お助けします」とも言える

心で出かけていくということです。

自分たちは、いわば「着の身着のまま」で出かけているわけですから、今日を精一杯生きることしか考えられないのです。そのために真剣になってどこかの家に

泊めてもらったり、食べるために少し食べ物を分けてもらったりしながら、その日、その日を生き、その状況の中で「神の国を宣べ伝えた」のです。

つまり、彼らは自分の生き様の中に「神の国の安心感」「神の支配のすばらしさ」を深く実感していなければ、神の国の祝福など、作り話になってしまい、単なるみすばらしいホラ吹き集団となってしまうでしょう。

何ももっていないのに、明るさを失わない、絶望しない、むしろ喜びと平安を醸し出している、そういう人が近くにいたら、きっと人は安心して寄ってくるでしょう。あるいは、そういう人が近づいても人々は逃げずには行かないでしょう。

でも、これはまさに謙遜の訓練となります。

気をつけないといわゆる奉仕者は「助けてください」といえない高慢さの罠にはまり、常に「助けてあげます」ばかりを強調し、自分の手柄に数え上げ、その挙げ句に「これをやってあげたのだから、しっかり献金するように」というような「助けてもらう」側の痛みや辛さ、悲しさをないがしろにする傾向があります。

私達は、本当に気をつけながら「わたしは人に助けてもらいながら、誰かのお手伝いをさせてもらっている」という自覚を育てる必要があると思います。

それはイエス様が弟子たちを遣わした、ひとつの目的でもあると思います。

彼らには、人格的な練り上げが必要でした。

その土台は「謙遜」「助けること、助けられることのバランスを失わないこと」にありました。

そして、最も重要なことは「弟子たちはイエス様の派遣を喜び、出かけていった」ということです。

イエス様からの権威を受けて、弟子たちは出かけていきましたが、この権威とは心の中の確信であって、目に見えるものは一切ありませんでした。

いわば、水戸黄門の印籠のようなものはまったくなかったのです。

弟子たちの信仰だけでした。

でも、彼らはイエス様からの派遣を受けて、出かけて行きました。

結果については、どうなるかわからないのです。行かなければ、そもそも何も始まらないのですから。

さて、これらの事柄は、私達に何を語ってくれているのでしょうか。

実は、あなたがもし、イエス様を信じているなら、きっとイエス様はあなたを派遣し「置いてくださって」いることでしょう。

それは職場なのか、家庭なのか、学校なのか、あるいは別の地域なのかわかりませんが、どこであるにしても、イエス様はあなたに「神の国の祝福」を運ぶ器として選んで下さっていると思うのです。

自分にはそんな力も無ければ、能力も、知恵もないです、という言葉が聞こえそうですがイエス様の弟子たちもそうでした。

権威や力はイエス様が、必要に応じて、そのとき、そのときに彼らに備えてくださったのだと思います。

問題は「出かけていくか」どうかです。

イエス様からの派遣の意識を胸に、今日、それぞれの場所に出かけているかどうか。それぞれの場所で精一杯、イエス様からの派遣の意識をもって生きることに関心しているかどうか。

要請に応じて、出かける心が湧いてくるかどうか。

燃える心で前に進もうとしているかどうか。

ちょっと意識の整えが必要です。覚悟も必要でしょう。

でも、その意識をもって、つまりイエス様から派遣されているという意識で出かけたなら、あなたの言葉も態度も、物腰も間違いなくかわって来ると思います。

私達は、自分をボスとし、自分のやりたいことのみを考え、自分への評価ばかりを気にしていませんか。

今日から、イエス様からの派遣を受けた存在という自覚をもって「出かけましょう」「助けてください」と言ってみましょう。「なにかお手伝いできますか」と伝えて見ましょう。

さまざまな関係が変化し、神の国の広がり、つまり「救いと平和と喜び」の深い味わいがあなたの中に、あなたの周囲の中に広がり、深まります。

マザー・テレサが「解放」という祈りを紹介しています。偏見や恐れに不安になり、ものがないことへの不安もあったであろう弟子たちの心の中の葛藤とも言える祈りだと思います。そして貧しい人たちの中の最も貧しい人たちに仕えることを本文としたマザーも同様だったのだと感じます。出かけていく際、必要な祈りです。

【解放】

マザーテレサが愛したいのり

イエスよ わたしを解放してください
愛されたいという思いから
評価されたいという思いから
重んじられたいという思いから
ほめられたいという思いから
好まれたいという思いから
相談されたいという思いから
認められたいという思いから
有名になりたいという思いから
侮辱されることへの恐れから
見下されることへの恐れから
非難される苦しみへの恐れから
中傷されることへの恐れから
忘れられることへの恐れから
誤解されることへの恐れから
からかわれることへの恐れから
疑われることへの恐れから

何も持たずに派遣に応じる心にはこの祈りは
大切です。

でも、この祈りこそイエス様がしっかり聞いて
助けてくださる内容に溢れていると思います。
イエス様は常にあなたを愛で取り囲んでくださって
おられるからです。

**

<https://youtu.be/9-9dQuTmsTU>